

# 顧客満足度を意識した作業で受託面積増加 ～満足度100%を目指して～

愛西市 棚橋 誠さん（東川トラクター）  
水稻

【平成 24 年 8 月 21 日掲載】

愛西市八開地区（旧海部郡八開村）で150haにも及ぶ水田の作業受託を行っている棚橋さんを紹介합니다。棚橋さんは、高い技術力とその人柄で地区の水田農業を牽引してきました。平成22年にはその功績から、本県の農業・農村の振興や発展に尽くした方を表彰する「あいちアグリアワード」を受賞されています。

## 花き経営から水稻作経営へ

棚橋さんの就農当時、実家は切花や球根の生産を主体とした経営でした。しかし、棚橋さん自身は、手先を動かす農業は自分には向いていないとの考えから、機械化の進みつつあった水稻作に興味を持っていたそうです。

就農1年後の昭和45年に、その考えに共感する近隣農家（後に共同で法人組織を立ち上げる）と中古のトラクターと2条植えの田植え機を購入し、その当時は珍しかった水稻の作業受託を開始します。



棚橋 誠さん

## 地区の生産安定を目指して

昭和50年代に入ると棚橋さんが営農していた愛西市八開地区でも農家の兼業化が急速に進み、水田の作業受委託も一般的になっていきます。そこで、地区の水稻作農家における作業受委託を円滑に進めるため、地区の作業受託農家と現在の八開営農受託部会の前身となる八開村農業機械技能者連絡会議（以下、技能者連絡協議会）を設立しました。棚橋さんは、農業機械を普及当時から扱っており、作業技術にも優れていたため、若くして副会長に就任しました。

当時、八開地区の一部受託水田では低収量が問題となっていました。低収量水田の多くが砂質土壌であり、極端に肥持ちが悪いことが原因となっていました。棚橋さんは就農当時から様々な水田を受託していたこともあり、砂質土壌での水稻生産を安定させるには極早稲品種コシヒカリへの品種転換が有効であると考えていました。そのため、対象地区の農家を説得するとともに、技能者連絡協議会での作業受託の受入体制を整え品種の転換を図りました。その結果、300kg/10aであった収量が420kg/10aと大きく改善したそうです。



すくすくと育つコシヒカリ

## 東川トラクターの設立

作業技術の高さと八開営農受託部会の活動で得た地域の信頼から、棚橋さんへの作業委託は順調に増えていきます。しかし、収穫期の人員確保も含め、個人で経営できる面積の限界はすでに超えていました。そのため、さらなる作業の効率化と受託面積の拡大を図るため、就農当時から協力して受託作業を行ってきた近隣農家と平成16年に「農事組合法人東川トラクター」を設立しました。雇用環境を整えたことで、現在は従業員が10名、受託面積も150haと県内でも有数の水稲作経営体となっています。



東川トラクターの倉庫

## 従業員の採用、育成について

従業員の採用については、「話しているうちに、その人の人となりはわかる」と棚橋さんが言うように面接中の会話を重視しているそうです。また、人材育成のポイントは、①基本を守れる人間の育成、②今やるべき仕事を探せる人間の育成で、実際の作業も従業員の自主性に任せています。その為、東川トラクターには従業員の明確な予定表はありません。ただ、気をつけているのは「一人での作業は行わせない。」ということです。農業機械を扱う作業が多く、一歩間違えば重大な事故につながりかねないためだそうです。ちょうど取材時も3チームに分かれ、水稲の管理作業、野菜の収穫作業を行っていました。

棚橋さんは、法人化し従業員を雇っている以上、仕事を切らさないことも重視しており、水稲の作業に支障がでない範囲で露地野菜の栽培にも取り組んでいます。現在はカボチャが収穫期を迎えており、倉庫いっぱいに並んでいました。その他にも、水稲作業の農閑期である12月～2月に播種期を迎えるタマネギや収穫期を迎えるブロッコリーの栽培も行っています。



収穫期を迎えたカボチャ

## 顧客満足度を意識した作業

棚橋さんが水田受託を行う上で常に意識してきたのが、作業を委託してくれた農家に満足してもらえる仕事です。経営理念を伺った際にも「きれいに管理された水田を見て、この人に頼んでよかったと思ってもらえるような仕事をしたい。」と作業に対するプライドがひしひしと伝わってきました。「将来的には、自前のライスセンターを整備するとともに営業職を設けて、生産から流通まで自社で行えるようにしていきたい。」と今後の東川トラクターについても語ってくれました。



東川トラクター倉庫横に並ぶ10台のトラクター

執筆：農業経営課

取材協力：海部農林水産事務所農業改良普及課